

# 源氏物語と長恨歌

其十

上野 英二

## 其十 長恨三代

桐壺帝は、溺愛のあまり、桐壺更衣を不幸な死へと追いやつてしまった。

一人取り残された帝。桐壺帝はその悲しみを如何ともし難く、『長恨歌』とその絵、そしてそれを巡る漢詩や和歌に託して、亡き妃を偲ぶのであった。

この頃、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせ給ひて、伊勢、貫之に詠ませ給へる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、たゞその筋をぞ、枕言にせさせ給ふ。

(桐壺)

けれども、父が父なら、子も子であった。桐壺更衣の遺児、光源氏もまた、元服とともに娶った妻、葵上を、ついに幸せになし得ぬまま死に至らせてしまふ。彼もまた、その悲しみを『長恨歌』に託すのだった。

哀悼の光源氏。

(左大臣) 御帳の前に御硯などうち散らして、手習ひ捨て給へるを取りて、目を押し絞りつゝ見給ふを、若き人々は、悲しきなかにも、ほゝゑむあるべし。あはれなる古言ども、唐のも大和のも書きけがしつゝ、草にも真名にも、さまざまめづらしき様に書き交ぜ給へり。「かしこの御手や」と、空を仰ぎて眺め給ふ。よそ人に見奉りなさむが惜しきなるべし。「旧き枕故き衾 誰とゝもにか」とある所に、

亡き魂ぞいと悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

また、「霜の花白し」とある所に、

君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひ幾夜寝ぬらむ

(葵)

源氏は、亡き葵上を偲んで筆を遊び、漢詩や和歌を手すさびに書き付けた。漢詩の句はともに『長恨歌』のもの、「鴛鴦瓦冷霜花白 旧枕故衾誰与共」。和歌もそれに因むものであった(其三参照)。

桐壺巻と同工異曲。愛する女を悼むのに、ともに『長恨歌』が用いられる。

正妻葵上を失った源氏の嘆きは大きい。けれども、葵上に死をもたらししたのは、六条御息所の生霊。光源氏の

寵を受けた御息所は、その正妻葵上に対し嫉妬の炎を燃やし、生霊となって取り殺したのだった。無論、政略結婚の弊もあつたけれど、詰まるどころ、葵上を死に至らしめた原因は、源氏の多情にあつたのである。

葵上の死をめぐって、物語は、『長恨歌』を用いながら、源氏の悲しみを痛切に歌い上げる。しかし、歌い上げれば歌い上げるほど、源氏の身勝手が浮かび上がることもなる。

葵上の死に直面して、源氏は悲嘆に昏れる。けれども、葵巻のその前後には、源氏の多情を告げる記事が並んでいるのだ。

葵祭、賀茂の斎院の御禊の際、葵上と六条御息所との間に車争いが起きる。これが、御息所憤悶の直接的契機となるのだが、両者の反目を余所に、賀茂の祭の当日には、源氏は紫上と同車して祭見物を楽しむのであつた。しかもその途上で、源氏はかつて交渉のあつた源典侍とたわむれの歌をやりとりしてもいる。

葵上発病の後も、源氏はあるうことか、一方の当事者たる御息所を見舞い、一夜を過ごす。その蔭で葵上は、一人ひっそり息を引きとるのであつた。

加えて源氏は、その死後にも、御息所、朝顔宮などと贈答を交し、心を慰め、さらに藤壺にも思いをかける。そして、葵上の精進明け早々、源氏は紫上と新手枕を交すのである。

正妻、葵上の生死のかかった大事のかたわらで、これは少しく節操に欠けるのではないか。六条御息所の憂悶も、葵上の発病も、もとはと言えば、源氏の多情に起因する。いくら『長恨歌』よろしく悲嘆に昏れようとも、源氏は、自ら播いた種に自業自得を思うべきなのである。

「長恨」の物語は、ここでもやはり、男の身勝手に翻弄された女性の悲運の物語になっている。

葵卷の光源氏は、詰まるところ、父桐壺帝の二番煎じでしかなかった。あの父にしてこの子あり。女性をむざむざ死に追いやってしまった点において、二人の男は大きく変わるところが無い。

葵卷は、『長恨歌』に基づくばかりでなく、桐壺卷をもなぞって書かれている。

葵上と桐壺更衣の重態の様。

むげに限りの様にもやし給ふを、聞え置かまほしきこともおはするにやとて、

(葵)

限りとて別る、道の悲しきにかまほしきは命なりけり

いとかく思う給へましかば」と、息も絶えつ、聞えまほしげなることはありげなれど、

(桐壺)

枕頭に駆けつける、光源氏と桐壺帝。

白き御衣に色あひいと華やかにて、御髪の毛いと長うちちたきを、引き結ひてうち添へたるも、かうてこそ、らうたげに艶めきたる方添ひて、をかしかりけれと見ゆ。御手を取らへて、「あないみじ。心憂き目を見せ給ふかな」とて、ものも聞え給はず泣き給へば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたげに見上げて、うちまもり聞え給ふに、涙のこぼる、様を見給ふは、いかゞあはれの浅からむ。御いらへ時々聞え給ふも、なほいと弱げなり。

「いさや、聞えまほしき」といと多かれど、まだいとたゆげに思し召したればこそ」

いとをかしげなる人の、いたう弱り損はれて、あるかなきかのけしきにて臥し給へる様、いとらうたげに心苦しげなり。<sup>(1)</sup>

(葵)

いと匂ひやかに、うつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひ染みながら、言に出で、も聞えやらず、あるかなきかに消え入りつ、ものし給ふを御覧するに、来し方行く末思し召されず、よろづのことを泣く／＼契り宣はすれど、御いらへも聞え給はず、まみなどもいとたゆげにて、いとゞなよくと、我かのけしきにて臥したれば、いかさまにと思し召し惑はる。

(桐壺)

女君の絶命。

内裏に御消息聞え給ふ程もなく、絶え入り給ひぬ。

(葵)

御使ひの行き交ふ程もなきに、なほいぶせさを限りなく宣はせつるを、「夜中うち過ぐる程になむ、絶え果て給ひぬる」

(桐壺)

その死を悲しむ人々の反応。

足を空にて、誰もくもまかで給ひぬれば、

(葵)

大臣は、え立ち上り給はず、

車よりも落ちぬべうまろび給へば、

(桐壺)

さらに、女君を静かに偲ぶ、秋の夜の情景。

深き秋のあはれまさりゆく風の音、身に染みけるかなと

(葵)

風の音、虫の音につけて、ものゝみ悲しう思さるゝに、

(桐壺)

秋の夕暮、それも風騒ぐ露けき夕べは、淋しさも募る。

時雨うちして、ものあはれなる暮つ方、

君は、西のつまの高欄に押しかゝりて、霜枯れの前裁見給ふほどなりけり。風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、涙も争ふ心地して、

折知り顔なる時雨うちそゝぎて、木の葉誘ふ風、慌しう吹き払ひたるに、御前に候ふ人々、ものいと心細くて、少し隙ありつる袖ども潤ひわたりぬ。

(葵)

野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、野分にいとゞ荒れたる心地して、

鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな

御前の壺前栽の、いと面白き盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに、心にくき限りの女房四五人候はせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。

(桐壺)

この、最後の桐壺巻の一節の後半は、葵巻にも殆どそのまま受け継がれている。

暮れ果てぬれば、御殿油近く参らせ給ひて、さるべき限りの人々、御前にて物語などせさせ給ふ。

(葵)

さらに、葵上の母、大宮と、桐壺更衣の母、北の方の悲嘆の様。

宮は、目も見え給はず沈み入りて、御返りも聞え給はず。

日頃はいと涙に霧りふたがりて、

目も見え侍らぬに、かく畏き仰せ言を光にてなむ。

母君、とみにえものも宣はず。

(桐壺)

葵上の父、左大臣の悲嘆の様もまた、桐壺帝や母北の方のそれに似る。

大臣の、闇に昏れ惑ひ給へる

(葵)

昏れ惑ふ心の闇も耐え難き片端をだに晴るくばかりに

(桐壺)

人目もいとみだりがはしく、心弱き様に侍るべければ、

(葵)

人も心弱く見奉るらむと、思しつゝまぬにしもあらぬ

(桐壺)

いくばくも侍るまじき老いの末に、うち捨てられたるが、辛うも侍るかな

(葵)

あまたさるまじき人の恨みを負ひし果て／＼は、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、

(桐壺)

契長からで、かく心を惑はすべくてこそありけめと、かへりては辛く、前の世を思ひやりつゝなむ。

(葵)

あながちに人目驚くばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今は辛かりける人の契になむ。

前の世ゆかしうなむ。

かへりては辛くなむ。

(桐壺)

父も父なら、子も子である。ともに妻を幸せにすることが出来なかつた。

そもそも葵卷の冒頭には、源氏の六条御息所との軽々しい付き合いを、父桐壺帝が源氏に戒めたことが記されていた。



心のすきびにまかせて、かくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり。

人のため、恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の怨みな負ひそ。

(葵)

事は「すきわざ」にのみ留らない。恋愛について「女の怨み」を買うこと自体が戒められていた。源氏はそれに従うべきであったのではなかったか。

しかし、すでにその訓戒を、当の桐壺帝自身が裏切っていたのだ。

桐壺巻における帝の反省。

世にいさゝかも、人の心を曲げたることはあらじと思ふを、たゞこの人の故にて、あまたさるまじき人の怨みを負ひし果てくは、かううち捨てられて、心をさめむ方なきに、いとゞ人悪う頑なになり果つるも、前の世ゆかしうなむ。

(桐壺)

父帝の光源氏への訓戒は、自身の若い失敗に出るものなのであった。しかし、息子光源氏も、結局同じ轍を踏むことになってしまう。<sup>(3)</sup>

葵巻の光源氏もまた、我が身を振り返って、その所業を悔いている。

殿におはし着きて、つゆまどろまれ給はず。年頃の御あり様を思し出でつゝ、などで、つひにはおのづから

見直し給ひてむ、とのどかに思ひて、なほざりのすさびにつけても、辛しと覚えられ奉りけむ、世を経て、疎く恥かしきものにて過ぎ果て給ひぬる、など、悔やしきこと多く思し続けらるれど、かひなし。(葵)

けれども、後悔先に立たず。反省も悔いて詮無く、結局は「かひなし」というところに帰着するばかりであった。

揃いも揃って、度し難きは男。そうした嘆息さえ聞こえて来そうであるが、しかし光源氏は、そうした「長恨」の物語を、さらに性懲りも無く繰り返すことになる。

その生涯の末、永年連れ添った紫上を失った源氏を描く、御法、幻の二巻には、それが一層執拗に描き出されている。幻巻に『長恨歌』が活用されること、前述の如くだが(其二参照)、物語の展開にも、桐壺巻を髣髴とさせるものがある。

紫上の発病と桐壺更衣のそれ。

紫の上、いたうわづらひ給ひし御こ、ちの、ち、いとあつしくなり給ひて、

(御法)

いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、

(桐壺)

紫上は出家を、桐壺更衣は実家への退出を願った。けれども、源氏も桐壺帝もそれを許さなかった。

行ひを紛れなくと、たゆみなく思し宣へど、さらに許し聞え給はず。  
まかでなむとし給ふを、暇さらに許させ給はず。

(御法)  
(桐壺)

男達は、なすすべとてなく、むなしく二世を契るばかりであった。

後の世には、同じ蓮の座をも分けむと、契り交し聞え給ひて、

(御法)

よろづのことを、泣く／＼契り宣はずれど、

「限りあらむ道にも遅れ先立たじ」と契らせ給ひけるを、<sup>(4)</sup>

朝夕の言種に、翼をならべ、枝を交さむと契らせ給ひしに、

(桐壺)

しかし、女君は衰弱してゆくばかり。

夏になりては、例の暑さにさへ、いとゞ消え入り給ひぬべき折々多かり。そのこと、おどろ／＼しからぬ  
御こゝちなれど、たゞいと弱き様になり給へば、

(御法)

その年の夏、御息所、はかなきこゝちにわづらひて、  
あるかなきかに消え入りつゝものし給を、

たゞ五六日のほどに、いと弱うなれば、

(桐壺)

遺言とても、ともにかはばかしく言い残されたわけではなかった。

おほどかに言少ななるものから、あさはかにはあらず宣ひなしたるけはひなどぞ、言に出でたらむよりもあはれに、もの心細き御けしきはしるう見えける。

(御法)

いとあはれと、ものを思ひしみながら、言に出で、も聞えやらず、あるかなきかにももし給ふを御覽するに、来し方行く末思し召されず、

(桐壺)

祈禱を急がせる使者の数々。

御誦經の使ども、数も知らず立ち騒ぎたり。

(御法)

「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」と聞え急がせば、

(桐壺)

しかし、その甲斐もなく、女君は息を引き取る。

続く葬送。

とかくをさめ奉る。限りありけることなれば、

(御法)

限りあれば、例の作法にをさめ奉るを、

(桐壺)

限りなくいかめしき作法なれど、

(御法)

いとかめしうその作法したるに、

(桐壺)

参列の人々の悲嘆の様。

車よりもまろび落ちぬべきをぞ、もてあつかひける。

(御法)

車よりも落ちぬべうまろび給へば、さは思ひつかしと、人々もてわづらひ聞ゆ。

(桐壺)

紫上を偲ぶ、人々のあり様は、そのまま桐壺更衣を想う桐壺帝の描写でもあった。

風野分だちて吹く夕暮に、昔のこと思し出で、

(御法)

野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、

(桐壺)

風の音虫の声につけつ、涙落とさぬはなし。

(御法)

風の音虫の音につけて、ものゝみ悲しう思さるゝに、

(桐壺)

しかし、女君をどれほど想おうとも、その死は、如何ともすることが出来ないものであった。源氏の最終的述懐。

千年をもろともにと申し、かど、限りある別れぞいと口惜しきわざなりける。

(幻)

それは『源氏物語』巻頭、桐壺帝の感懐に、はるかに呼応するかのようである。

朝夕の言種に、翼をならべ、枝を交さむと契らせ給ひしに、叶はざりける命の程ぞ、尽きせず恨めしき。

(桐壺)

いづれも男達は、ただただ「長恨」を久しうするばかりであった。

続く幻巻においても、光源氏は最愛の紫上を失って、桐壺帝同様、他の女性達には目も呉れずに、ひたすら彼女を偲ぶのだった。

絶えて御方々にも渡り給はず、

(幻)

程経るまゝに、せむかたなう悲しう思さるゝに、御方々の御宿直なども絶えてし給はず、

(桐壺)

わずかに心を慰められるのは、女房達と紫上の思い出を語り合うことでしかなかった。

夜の御宿直などにも、これかれとあまたを御座のあたり引きさけつゝ、候はせ給ふ。つれづれなるまゝに、古への物語などし給ふ折もあり。

中納言の君、中将の君などは、御前近くて御物語聞こゆ。

かくのみ嘆き明かし給へる曙、眺め暮らし給へる夕暮などの、しめやかなる折々は、かのおしなべてには思したらざりし人々を、御前近くて、かやうの御物語などをし給ふ。  
(幻)

亡き紫上を偲んで、女房たちと「物語」する源氏。しかし、それも父桐壺帝の二の舞を演ずるものであった。

御前の壺前栽の、いと面白き盛りなるを、御覧するやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人候はせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。  
(桐壺)

桐壺更衣を溺愛した父桐壺帝。そして、紫上を生涯愛した息子光源氏。しかし、にも拘らず、ともに女君を幸

せにすることは出来なかつた。

確かに紫上は、光源氏の愛情を一身に受け、正妻格の女性として一生を共にするが、しかしその人生は、必ずしも順風満帆なものではなかつた。幼い頃源氏に見染められて、無理やり源氏の手元に引き取られて鍾愛を受けるものの、それは叔母藤壺の身替りとしてであつた。多情な源氏には、正妻葵上の他に明石君、朝顔宮その他、常に多くの女性の影があつて、彼女は嫉妬に苦しめられることが多かつた。それらを乗り越え、ようやく源氏の身辺も落着きを見せ、六条院の女主としての安定を得るかに見えた紫上を脅やかしたのは、源氏には後妻に当る、女三宮の降嫁であつた。このことがあつて以来、紫上は苦悩を深め、やがて発病。出家をも想うが、源氏に引き止められるままに、生涯を閉ぢることになつてしまふのであつた。「『源氏物語』は、父において追求しようとしたことを、今度は子の生涯の末に、その子において追求しようとしたのであつた」(拙稿「はかもなき鳥の跡とは思ふとも―源氏物語を書くこと―」、『源氏物語序説』所収)と云うべきか。

この後、桐壺巻の叙述は、桐壺帝の『長恨歌』愛玩のことに移るが、

この頃、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせ給ひて、伊勢、貫之に詠ませ給へる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、たゞその節をぞ、枕言にせさせ給ふ。  
(桐壺)

これがそのまま、幻巻にも受け継がれること、言うまでもない(其二参照)。



蛸の声華やかなるに、御前の撫子の夕映えを一人のみ見給ふは、げにぞかひなかりける。

つれづれとわが泣き暮らす夏の日をかこがましき虫の声かな

螢のいと多う飛びかふも、「夕殿に螢飛んで」と、例の古言もかゝる筋にのみ口馴れたり。

夜を知る螢を見ても悲しきは時ぞともなき思ひなりけり

(幻)

しかし実は、そればかりではなかった。これに似た場面は、本章冒頭にも引いたように、葵巻にもあった。とすれば、『長恨歌』による哀傷の場は、桐壺、葵、幻と繰り返されたことになる。

別けても葵と幻のそれは、ともに『長恨歌』の歌句を引いて、それをもとに歌が詠まれる。しかもいずれも、「常夏」すなわち「撫子」が、文字通りそれに花を添える。

二つの場面は単に似ているだけではないであろう。恐らく後者は、前者の記憶をはるかに喚び起こすべく似せられているふしがある。

紫上の死を描く御法巻には、葵上の死が何度か回想されていた。

昔、大将の君の御母君亡せ給へりし時の暁を思ひ出づるにも、かれはなほものゝ覚えけるにや、月の顔の明らかに覚えしを、今宵はたゞ昏れ惑ひ給へり。十四日に亡せ給ひて、これは十五日の暁なりけり。

昔、大将の御母上亡せ給へりしも、この頃のことぞかしと思し出づるに、いともの悲しく、

(御法)

源氏の多情が、結局は葵上を死へ追いやった。紫上の場合もまた同断、紫上の死に葵上の死を重ねて描くことで、『源氏物語』は、源氏の失態を浮かび上がらせようとしたのではないか。

葵巻に留まらず、桐壺帝の自省に基づく訓戒を、ここでも源氏は再び破る結果となってしまう。親しい女房達と亡き女君を偲ぶ「物語」の情景が、ともに桐壺のそれに似ること、すでに述べた。『源氏物語』は、源氏の所業を、葵巻を介して桐壺巻へと溯らせて炙り出して行く。

御法巻における光源氏の描写には、遠く桐壺巻の父帝の描写が空しくこだましているようである。

人に、ほけくしき様見えじ、今さらに我が世の末に、頑しく心弱き惑ひにて、世の中をなむ背きにける  
と、流れとまらむ名を思しつゝむになむ。  
(御法)

かつは人も心弱く見奉るらむと、思しつゝまぬにしもあらぬ御けしき  
(桐壺)

結局のところ、桐壺帝も光源氏も、最愛の女性に先立たれ、無惨にも「うち捨てられ」という結末に陥ることとなる。

年経ぬる人に後れて、心をさめむ方なく忘れ難きも、たゞかゝる仲の悲しさのみにはあらず。幼き程より生ほしたてしあり様、もろともに老いぬる末の世にうち捨てられて、我が身も人の身も思ひ続けらるゝ悲しさの堪へ難きになむ。  
(幻)

たゞこの人の故にて、あまたさるまじき人の怨みを負ひし果てくは、かううち捨てられて、心をさめむ方なきに、いとゞ人悪う頑なになり果つるも、前の世ゆかしうなむ。

(桐壺)

桐壺帝もむざむざ女君を死へと追いやつた。葵卷の若き源氏もそうであつた。そして生涯をかけたにも拘わらず、またしても源氏は紫上を不幸へと突き落としてしまう。

この罪は深いのではないか。

大空を通ふ幻夢にだに見え来ぬ魂の行方尋ねよ

(幻)

紫上を失つた源氏は『長恨歌』の道士を希求するが、父桐壺帝も桐壺更衣を偲んで、同想の歌を詠んでいた。

尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

(桐壺)

光源氏の生涯、その始末を括るかのように、両首の類似は際立っている。この対照は、あたかも合わせ鏡のように、父子にわたる、男の不甲斐無さを照らし出すかのである。

女三宮を娶つた源氏は、紫上の不幸のみならず、それ故にまた、それまで宮々として築いてきた六条院の理想的な栄華をも同時に失つてしまう。その罪はいよいよ根深いと言わなければならない。

罪深きは、男。

その点においては、源氏の衣鉢を継ぐ薫、宇治十帖のヒーローたる薫もまた、大きく変わるところはなかった。

宇治の大君に先立たれた薫が、その異母妹浮舟に引かれるようになって行くことを叙した箇所は『長恨歌』の引用が見られることは、前述した通りであるが（其三参照）、薫は、大君を思慕しながら、その堅固な拒絶の意志を如何ともし難いままに、結局は彼女を死に至らしめてしまふのだった。薫は、我が身への思慕を妹中君に振り向けようとする大君の思惑を封ずるために、匂宮に中君を引き合わせる。しかし、その一方で、匂宮は夕霧の六の君と結婚。大君は、妹の結婚を通して男の不実を思い知らされ、やがて死の床に臥すことになるのである。

薫は、その中君にも執心を見せるが、それも、後の祭。すでに匂宮に譲った以上、中君もまた、薫にはどうすることも出来ない存在になっていた。二兔を追う者は一兔も得ず。またしても薫は、幸せを与え得ぬまま、女君に去られてしまふのだった。

そこに登場してきたのが、大君に似ると言う、異母妹浮舟であった。亡き大君の面影を忘れられない薫にとつて、浮舟を見出した喜びは、楊貴妃の魂を探り得た『長恨歌』の玄宗皇帝のそれに勝った、と宿木卷は記している（其三参照）。けれども薫は、浮舟に対しても優柔不断。匂宮につけ入る隙を与え、結局浮舟は、両者の板挟みに陥ってしまい、死を決意するに至る。

またしても、まさにまたしても、薫は女君を如何ともなし得なかつた。浮舟も、薫の元から逃れ去ってしまった。

けれども、失踪した浮舟は、横川の僧都によって救い出され、その元で出家、洛北小野の山里に隠れ住む。聞きつけた薫は、早速小君に手紙を託して使いに立てるが、浮舟は小君に会うことさえ拒絶した。『源氏物語』一巻の終わり、残された薫の周章を語って『源氏物語』夢浮橋は幕切れとなるのである。

すでに述べたように（其三参照）、この結末は、『長恨歌』を恐らく踏まえている。『源氏物語』においては、父も、その子も、さらにその子も、女君を失って、「長恨」を久しうするばかりなのであった。

何故の「長恨」か。ここには、井上靖の見解を引こう。

作者はここへ来るまでに光源氏を中心に置いて宮廷人たちの愛慾生活を思う存分書き綴り、その愛の対象となつた数多くの女性とその運命を紹介して来ているが、作者はそうしたものへの総括的批判をどこかに書かなければならなかつたのである。そしてその役割を持つているのが宇治十帖であり、そしてそれが美事に二人の男性と三人の女性の恋物語の形において為されるのである。

源氏物語の作者の恋愛観、女性観は、大君の、自分に求愛する薫に対する態度においてはつきりと示されている。作者は男の愛情によって、決してこの時代の女性というものが幸福を掴むことができないう牢固として抜くべからざる考えを持っていて、そしてそれが大君の求愛者に対するかたくなとさえ思われるような拒否の態度となつて現われているのである。

そして作者自身の男性不信が、つまり大君の男性不信が、いかに正しく、いかに間違いないものであるかを、中の君、浮舟という二人の女性を中心にした二つの恋物語によって証拠立てているのである。

男の主人公薫は一応誠実な男性として取り扱われているが、作者はその誠実な男性の愛情に対してさえ不信の念を持っていて、薫が大君の死後、中の君、浮舟への恋慕を描くことによって、やはり一般の男性と結局は異るところがないではないかという結論を読者に与えている。大君の男性不信への限りなき同感の表明である。

こういった点からみると、源氏物語は実にみごとに主題展開の効果が計算されている小説であり、ヨーロッパの近代小説においてさえ、これほど主観展開のための精巧なプロットの構築を見ることは希であろうと思う。

（「宇治十帖私見」、『太陽』第四九号）

「作者自身の男性不信」。

長恨三代、滔々たる『源氏物語』の、「長恨」の物語に託そうとしたことも、ここに見出だすことが出来るのではなからうか（其八参照）。

「『源氏物語』は同じ主題を繰り返して書く。しかしそれは単なる反復なのではない。繰り返すことによって、むしろ『源氏物語』は自らを書くことの中に探求しているのだとも言うべきであらうか。倦むことなく書き続けられて『源氏物語』はあの長大な物語へと展開したが、それを衝き動かして尽きることない強い衝動が、その背後には存在していたのであった」（前掲拙稿）。

注

(1) 「病後の容姿が却つて一種の痛々しい美しさを添へるのは、(中略)

こよなう痩せ細り給へれど、かくてこそ、あてになまめかしき事の限りなさ勝りてめでたかりけれど、……限りもなくらうたげにをかしげなる御様にて、

といふ御法卷の紫上にも写されているが、同時に此処の

いとをかしげなる人の、いたう弱り損はれて、有るか無きかの気色にて臥し給へる様、いとらうたげに苦しげなり云々。

とある描写は、桐壺卷の

いと匂ひやかに美しげなる人の、いたう面痩せて、……有るか無きかに消え入りつゝ……。まみなどもいとたゆげにて、いとゞなよくと、我かの気色にて臥したれば、

とある桐壺御息所のそれを想起させ、類似の表現であることが指摘し得られると共に、死の近づく前の肉感の魅力の発現といつたものが共通に捉へられてゐる感がある」(鳥津久基『対訳源氏物語講話』)。

(2) その他、断片的な表現の類同も、桐壺、葵両卷には少なくない。

いとゞしき御祈りの数を尽くしてせさせ給へれど、

「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」と聞え急がせば、

男にてさへおはすれば、そのほどの作法、にぎは、しくめでたし。

世になく清らなる玉のをのこ御子さへ生まれ給ひぬ。

(桐壺)

(葵)

(桐壺)

(葵)

若君のいとゆゝしきまで見え給ふ御あり様を、今から、いと様異にもてかしづき給ふ様、おろかならず。

いとまはにておはしたるを、ゆゝしううつくしと思ひ聞え給へり。

この御子のおよすげもておはする御かたち、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見え給ふを、

この君をば、私物に思ほしかしづき給こと限りなし。

(桐壺)

のゝしり騒ぐほど、夜中ばかりなれば、

(葵)

「夜中うち過ぐるほどになむ、絶え果て給ひぬる」とて泣き騒げば、

(桐壺)

いみじき御心惑ひども、

(葵)

聞こし召す御心惑ひ、

(桐壺)

尽きせず思し惑へど

(葵)

尽きせずいみじうなむ。

(葵)

尽きせず恨めしき。

(桐壺)

後の宮、春宮などの御使、さらぬ所々も参り違ひて、

(葵)

御使の行き交ふ程も無きに、

(桐壺)



いとゞ露け、れど

いとゞしく虫の音しげき浅茅生に露おき添ふる雲の上人

(桐壺)  
(葵)

たゞかき昏らす心地し侍るはさるものにて、

乱り心地のみ動きてなむ。

(葵)

かき昏らす乱り心地になむ。

(桐壺)

見奉る人々もいと悲し。

(葵)

見奉る人さへ露けき秋なり。

(桐壺)

さしあたりて覚え侍る心惑ひは、類ひあるまじきわざになむ。

(葵)

聞こし召す御心惑ひ、何事も思し召し分かれず、籠りおはします。

(桐壺)

たゞ日頃に添へて、恋ひしさの耐へ難き

(葵)

しばしは夢かとのみたどられしを、やうく思ひ静まるにしも、覚むべきかたなく耐へ難き  
待ち過ぐす月日に添へて、いと忍び難き

(桐壺)

御声もえ忍びあへ給はず泣い給ふに、

(葵)

はかしくしも宣せやらす、むせ返らせ給ひつゝ、  
言ひもやらす、むせ返り給ふほどに、

(桐壺)

若き人々は、所々に群れあつ、おのがどち、あはれなることゝもうち語らひて「殿の思し宣はするやうに、若君を見奉りてこそは慰むべかめれと思ふも、いとはかなきほどの御形見にこそ」とて、おのゝ、「あからさまにまかで、参らむ」と言ふもあれば、

(葵)

いはけなき人をいかにと思ひやりつゝ、もろともに育まぬおぼつかなさを、今は昔の形見になすらへてものし給へ。

若き人々、悲しきことはさらにも言はず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうぐしく、上の御あり様など思ひ聞ゆれば、とく参り給はむことをそ、のかし聞ゆれど、

(桐壺)

思ひ尽きせぬことゝもを、程経るにつけてもいかに

(葵)

程経ば、すこしうち紛るゝこともやと、

(桐壺)

(3) 同様に、夕顔を失つた光源氏を描く、夕顔巻の描写にも、桐壺巻の桐壺帝の描写に似るところがある。

いかなる昔の契にかありけむ。しばしの程に、心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち捨て、惑はし給ふが、いみじきこと。

はかなかりし夕べより、あやしう心にかゝりて、あながちに見奉りしも、かゝるべき契こそはものし給ひけめ

と思ふも、あはれになむ、またうち返し辛う覚ゆる。かう長かるまじきにては、

(夕顔)

我が御心ながら、あながちに人目驚くばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今は辛かりける人の契になむ。世にいさ、かも、人の心を曲げたることはあらじと思ふを、たゞこの人の故にて、あまたさるまじき人の怨みを負ひし果てくは、かううち捨てられて、心をさめむ方なきに、いとゞ人悪う頑なになり果つるも、前の世ゆかしうなむ。

(桐壺)

夕暮の静かなるに、空のけしきいとあはれに、御前の前栽枯れぐに、虫の音も鳴き枯れて、紅葉のやうく色づくほど、絵に描きたるやうに面白きを見渡して、心よりほかにをかしき交らひかなと、かの夕顔の宿りを思ひ出づるも恥かし。

(夕顔)

野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、

御前の壺前栽の、いと面白き盛りなるを、御覧ずるやうにて、

(桐壺)

(4) 御法の上文にも「院の思ほし嘆くこと限りなし。しばしにても後れ聞え給はむことをは、いみじかるべく思し」とあつた。

(5) 幻卷にはまた、

故後の宮の隠れ給へりし春なむ、花の色を見ても、まことに心あらばと覚えし。

(幻)

と、藤壺の死も回想されている。無論これも、天帝の愛妃への禁断の恋に憂き身をやつした源氏の所業を、それとなく浮かび上がらせようとするものであろう。

